

148

No. 148

150

軍資秘

明石海峡附近のシオと風

宇田道隆

海洋時報

第十三卷第四號別刷

(昭和18年3月)

神戸海洋氣象臺

雑 報

明石海峡附近のシオと風

宇田 道隆

昭和17年12月12日に所用で明石に赴いた節、兵庫縣水産試験場長松井住一博士、同場技師内橋謙氏に明石漁業組合に紹介して頂き、同漁業組合長のお世話で、當地の釣漁業に最も経験の深い古老魚住藤吉氏から色々方面のシオ、風、潮に關する經驗談を拜聴した。そのお話のうち研究上大變示唆に富むものがあるので後日査査の参考の爲め茲に記してみる。

毎年舊曆の正月、2月、3月は漁業の霜枯期で舊の10月から鯛は釣れぬ。寒に入ると海鳥がいかか魚群を塊めた「餌床」が出来、節分時分が揃つたり漁の最盛期である。新の1月から鱈、鱧、アブラメ、鰯の漁がある。3月から節分後約6、70日になると鯛が漁れ出す。節分後45日～50日に紀州沖で鯛釣盛りとなり、「上り鯛」といつて紀淡海峡から内海へ廻つてくる。漁船は之れを迎へて紀州沖へ行き、魚群を逐つて内海へやつて来る。

明石海峡には寒中も1貫匁位の大潮もをるが釣餌を喰はぬ。網に上つたり、シオの強烈な時(大潮)や時候の關係で海水の冷たい時(梶山氏の「鯛」にある冷水波)に腹を膨らまして浮上し捨はれるので居ることはわかる。陰曆の1日～6日、15日～20日の大潮時特に落潮時に強烈で、三挺棒でも上れない事がある。

大潮の中でも春秋の大潮がひどく、「3月の節句潮」は秋の大潮とは潮時が夜露逆轉し、殊に秋の大潮は夜よく干上る。

明石海峡でも淡路の岩屋の藪下附近(圖参照)はシオが一番強く、「シオの闘ひ」がえらく「ハタゼカレ」(縁邊迫かれの意)と云ひ難破船が多い。岩屋燈臺から二丁位離れた所が潮流が一番速く、ヒキシオの半時間前が最も危険である。沿岸には「ワイシオ」(反流)がある。

藤江の前方1里位の所にある「クシャレ」(クシャクシャと潮波が立つてゐて、瀬縁で、そこから底深が急に深くなる)と稱する所は、はいると、小帆船はきつと沈没したといふ難所である。此處で「イヤイニチ」(厭な満ちシオの訛か?)と云ふのはヒキシオの半時間前に一番恐い浪の立つシオである。殊に風が下(西)から来た時これと闘つてひどい浪が立つ。風の時でも波立つてゐる。此處では特に西風、

マゼが恐い。明石の沖に俗稱「馬の脊」といふ淺瀬が走つてゐる。この南を航行すれば間違ひない。大西風とこのシオで毎年小船が2、3隻遭難した。よく南沖を通らずに播磨に沿つて明石海峡を抜け西航しやうとして難船した。播州室の港では西風の蔭になつてゐる。そこで「潮待ち、風待ち」をして、艦の丈だけの高き位潮の干いた時船を出して、大阪の方へ来れば間違ひなかつた。帆船は冬季は大阪の方からは逆風のため、須磨で西風の風間でなければ通れなかつた。それで冬風間には明石沖を何隻も何隻も續いて一遍に通つた。

春霧、舊の2月3月頃マゼ(辰巳風、東南風のこ)が吹き入れた揚句雨が上る時霧のことが来ると云つてゐる。屋島丸のやられたのも強烈なマゼの所爲であつた。霧は半丁先も見えぬことがある。舊の8月野分時分(颯風季)に南東風が東の「イナサ吹き」があると中國側沿岸に浪が立つ。「春一番」、「春二番」と云つて、春のマゼは地方(海岸)に来て浪が高いからこわい。丁度鯛釣季に吹くので、「春一番」のマゼに遭難して死んだ者は少くない。舊2月頃といへば水も冷たい(水温7～10℃)ので凍へる。坐礁もある。マゼには浪のため明石の港に船はいれないことがある。霧はシオが代つたら晴れ、或は新たに現れる。二潮(略1日)も霧の續くことはなく、通常一潮である。春一番、二番の大南風の遅い年は漁期が遅れる。それは暖水がいつて来ず。魚群の入込みが遅いからである。

秋には海水濁る。北風か西風が吹き、風の具合で下層が攪き混ぜられて濁りが立つ。小潮になれば何時でも澄む。秋はミチシオがよく行き、風に向つてよく行く關係だらう、水が濁る。赤潮は春と10月頃に多い。雨は鳴門の方(西南方)から来るものは良く降る。上(大阪)の方から来る雨は大したことではない。晴も干潮、雨になるのも干潮で、「春干潮、秋湛え」と云つてをる。陰曆の15日～20日迄「月の出、月の入り」秋は1日～3日迄大抵月の出に天氣よくなり、「出月に雨なし、をやまに子無し」といふ諺がある。月の入りには天候悪化し風になり、雨になる。小潮になると秋は日和になる。16日から出月で23日迄は天候が直つて来る。

春の東風氣(上の大阪方面からの風)になると悪潮即ち、變潮(氣象潮流)が行く、播磨灘に鯛群の入は節分後80日、90日、100日、110日になると明石込海峡から、鳴門の方からと香川方面からの三方から、播磨灘中央の鹿ノ瀬に「魚島」といふ鯛の産卵場が出る。此處はシオは餘り行かず、風も

こたへず底が柔かい泥である。120日になると鯛群分散し、「クシヤレ」「瀬ブチ」に來、播磨沿岸の藻場に稚魚が育つ。晩のヨウズ(南風)では晩のミチシオがよく行く。ヨウズが上げるといふ。月の10日乃至13日頃のミチシオに魚が乗つて來る。鹿ノ瀬三里の間はミチシオは北へ通り、ヒシオは南へ通る。室津ノ瀬ではミチシオは南に通り、ヒシオは北に通る。鹿ノ瀬燈臺附近は3,4尋の深さで、時に坐礁の危険がある。

大阪ジオ(水シオともいふ、大阪方面から來る河水の影響せる低鹹水)は中國沿岸を傳つて「クシヤレ」あたり迄來る。それが「ハタセカレ」(潮目のこと)になり浪立つ。**高砂ジオ**といふのは播州高砂から北風で加古川の排出する河水の影響する低鹹水で、黄色の泥水。淡水の「ヒキ」(海光)はボヤツとしてをり、磯が幽靈のやうに化けて、鱧も鯛も釣れない。沿岸では雨が降ると表層2~3尋を「水シオ」が蔽ひ、釣を下げても底へ立つたのがわからない。「水シオ」の所へエビなどの生釣餌を入れても死ぬる。3尋から下へ入れると死なないから「水シオ」の厚さがわかる。苦潮は當地では夏など雨が降らず、鹽分の濃くなつたシオで、磯魚漁などに悪影響がある。夏照りが續くと水腐る(水質惡變)。

大阪へ船の活州で生魚を運搬するのに沿岸を傳ふと舞子以東では水シオ(大阪ジオ)にはいるので鱧

や、柔魚など死ぬるし、鯛の色が悪くなる。南沖を通ると大阪ジオが來ないからよい。

時化が來る前は、シオ行きを見てみると1日、2日前からシオが狂ひ變る、**惡潮**(氣象潮流の變潮)が通る。舊8月の野分頃(颱風季)は水増え、水位高くなつてゐる。イナサ風が吹くと舞子沿岸あたりでは3日位前から**アビキ**(二次的潮沙振動)がひどくなつて來る。此等から日和(天候)を判斷すると確實に大風の來るのを豫察出来る。明石では高潮(暴風津浪)は上げない。

近年明石から舞子にかけて濱の砂が減つて昔盛んであつた鱧地曳網の場所が消滅した。明石の川口端の名物の燈籠が海中へ落ち、運動場が消えた。特に冬の砂減りが大きい。逆に水試漁業組合前には漂砂が溜る。西風が吹くと西に濱が出來東、風が吹くと東に濱が出來るといふ。これは土地の大きな問題である。

以上を通じて、地方的ではあるが、この方面のシオ、風の特異性と、航海、漁業、土木其他との密接な關係を推察せしむるものがある。氣象潮及び氣象潮流、海峡の特異な風と潮流、霧、春の大風、風向と雨との關係、太陽の運行と風雨の關係、沿岸波浪と風潮との關係、颱風と水位、靜振との關係等々が海洋氣象學的に究明すべき多くの問題を包含してゐる。

